令和６年度　兵庫県立氷上特別支援学校　学校評価報告書

１　教育目標
こころ豊かにたくましく生きる力を育み、将来、社会の一員として、学習を続け、生活できる人間を育成するため、一人一人の児童生徒の能力を伸ばす教育を行う。

２　重点課題
（１）　小・中・高一貫したキャリア教育の推進　　（２）　「つけたい力」を意識した授業づくりの推進　　（３）　危機予防・対応が可能な学校づくりの推進 （４）　兵庫県版コミュニティ・スクールを核とした学校づくりの推進　　（５）　研修の計画的な実施と内容の充実

３　判定
重点課題に対して、各学部・係部が設定した取組を全職員で評価し、その平均値を次のＡ～Ｄの４段階で評定した。
Ａ：良好（評価平均3.5以上）　Ｂ：概ね良好だが一層の取組が必要（評価平均3.0以上）　Ｃ：取組に相当の工夫が必要（評価平均2.0以上）　Ｄ：取組の見直しが必要（評価平均2.0未満）

重点課題	重点課題についての目標（学部・部）	目標実現のための取組	評定	次年度に向けて	担当
小・中・高一貫したキャリア教育の推進	全ての授業づくりにおいてキャリア教育の観点を踏まえたねらいの設定	指導略案にあるキャリア教育の観点の項目に単元ごとにねらいを必ず記入し、確認し合う。また、事前に配布することで職員の共通理解を図る。	B	同じ取組を続けるとともに、定期的に学部会でキャリア発達段階別取組一覧を確認するよう促し、意識を高める。	小学部
		中学部や高等部との交流学習を定期的に行い、学習内容や児童生徒の実態に関して情報交換を行う。	C	なかよしタイムの授業担当が兼任するのではなく、学校内交流担当を配置し、活動内容の充実を図る。 交流学習の事前打ち合わせを学部会等で行い、交流の意義や児童生徒の実態に関して共通理解を図る。	
	キャリア教育の充実	氷上キャリア教育発達段階別取組一覧表を基にキャリア教育の観点を指導略案に入れ、指導者の共通理解を図って、授業を行う。	C	引き続き、キャリアの観点を意識した授業を行えるように、氷上キャリア発達段階表を基に、指導略案に必ずキャリアの観点を入れる。また、キャリアの観点を意識できるように学部会で確認する。	高等部
		児童生徒の実態に関して情報交換を行った上で、小学部や中学部との交流を計画的に行う。	B	小中学部と計画的に交流を行うことができた。今後も児童生徒の情報交換を行いながら計画的に交流を行う。	
		新しく見直した発達段階表の効果的な活用と学部間での系統性のある授業づくりを推進する。	C	新しく作成した発達段階表の周知を十分に行えなかった。次年度はキャリアの視点を意識できるように発達別の取組表を年４回程度、定期的にクラスルームにあげて活用を促す。	キャリア教育部
		キャリア教育に係る研修会を開催する。	B	今年度のような基本的なポイントを押さえつつ実際の授業を元に協議する研修を行う。または、他校の取組を参考にして、本校におけるキャリア教育への理解・啓発を行う。	
	児童生徒会の充実	代表委員会で児童生徒が主体的に活動できるような運営を心掛けるとともに、全校の児童生徒の縦割り活動を推進する。	B	代表委員会では、上級生の活動を見て、今まで消極的だった生徒が、自分から役割に立候補するなどの変化が見られた。全校集会ではゲーム等を取り入れて、児童生徒の縦割り活動の充実を図った	生徒指導部
	進路指導の充実	進路指導連絡会を開催し、関係機関との情報交換を行うとともに、現場実習ならびに進路選択等において助言を生かす。	B	地域の関係機関、福祉事業所の方々に本格的な技能検定の指導内容に高評価を得た。ただ、見学授業の内容を職業に固定しているため、助言も似たようなものが多かった。見学する授業の内容を検討する必要がる。□	キャリア教育部
		高等部の生徒や保護者等に進路セミナーを行い、進路先を考えたり選択したりすることができるように情報提供を行う。	B	進路合同セミナーでは事業所、生徒、教師、保護者がお互いを知りそれぞれの立場から理解する機会として大きな成果が見られた。次年度は障害への意識が高い企業にも呼びかけ、さらに充実したものにしたい。	
	児童生徒個々の能力や特性に応じた自立活動の充実	「自立活動とは」「個別の指導計画（自立活動）の作成にかかわる思考の流れ」等の研修を行う。	B	自立活動の時間の指導（特にグループで行っている授業）のねらいや内容が、個々の自立活動のねらいから繋がり、個々の評価に返っていくように「自立活動（時間の指導）の流れ」のチェックシートを活用する。	研修支援部
		各学部、１本以上自立活動の研究授業を行う。	A	自立活動用の指導案の様式を活用し、より質の高いものにしていく。校内研修（基礎研修）に自立活動の内容を複数回設定し、学んだことを授業で生かせるようにする。	
		重度重複障害の児童生徒の担当者会を設け、担当者が相談しやすい体制づくりを行う。	B	学部を超えて合同で授業できるように教育課程を組んだり、核になる教師から声掛けしたりして、相談しやすい体制づくりを進める。	
		動作法からのアプローチによるからだの学習が行えるようにする。	C	研修を行い動作法の初歩を学んだが、次年度は対象が肢体不自由の児童生徒だけでなく、誰であっても体と心の成長に繋がることを理解し実践できるようにする。	

「つけたい力」を意識した授業づくりの推進	教育課程と個別の指導計画を意識し、児童がより主体的に活動できる授業を目指した授業改善	授業研究を利用してグループ学習（自立活動）の授業改善に通年で取り組む。児童の主体性を引き出す支援について意識して計画し、共通理解を行う。	B	引き続き授業研や各授業担当者の打ち合わせを通して授業改善を図る。その際、児童の主体性に関して重点的に検討するように共通理解をする。	小学部
	教育課程の検討	学級の日や学部会等で意見を出し合いながら、教科等の構成や時間数等、教育課程について検討や見直しを行う。	B	今年度、教育課程を大きく変更した。引き続き生徒の実態に応じて教育課程を検討、見直していく。	中学部
	主体的に活動できる授業の展開	授業研究での取組を中心としながら、生徒の実態に合ったねらいや学習指導要領に基づいた授業展開を考え、実践する。	B	学習グループで共通理解を図りながら、引き続き生徒の実態に合ったねらいや学習指導要領に基づいた授業展開を考え、実践していく。	
	学習活動に応じた指導体制の充実	学部の教員がチームで生徒に関わることができるよう、学級の日や学部会等で生徒についての事例検討を行い、指導や支援について共通理解を図る。	B	生徒の指導や支援についてチームで生徒に関わることができるよう、引き続き学級の日や学部会等で共通理解をしていく。	
		目標や学習課題に応じて学習グループの形態を工夫する。	B	引き続き、生徒の実態に応じた学習グループの形態を意識し、工夫していく。	
	わかって動ける授業づくり	生徒の実態に合ったねらいや、つけたい力を意識して生徒が主体的に動ける授業展開を考えたり、必要となる支援について適切に調整したりする。	B	生徒の課題や実態に応じて支援量を調節する意識ができてきた。今後も生徒の社会参加に向けて適切に支援を調整していく。	高等部
		つけたい力を意識した授業が行えるように、教師間の連携を図って生徒の実態や授業方法、支援方法の情報共有や検討を行う。	B	学部会や学年会で、生徒の実態や課題を情報共有することができた。引き続き実態、課題、支援内容を情報共有し、つけたい力を意識した授業が行えるようにしていく。	
	的確な実態把握と学習指導要領に基づく個別の指導計画の作成	個別の指導計画の作成にあたっての共通理解用の資料づくりと研修を行う。	B	次年度も年度当初に個別の指導計画の書き方に関する職員研修を実施していく。	教務部
		個別の指導計画の検討、読み合わせを各クラスで行い、記載内容を複数の目で確認する。	B	次年度も引き続き、個別の指導計画の記載内容を複数の目で確認していく。	
	ＩＣＴを活用した授業づくりの推進	校内のＩＣＴを活用した授業実践を集約し、職員間で共有する。	C	職員間で共有する場面を増やし、よりよい授業づくりに生かせるようにする。	
	「つけたい力」を意識した授業づくりと主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践	毎月、授業研究の日を設け、チームで教材研究や指導案の作成などを行うとともに、授業の公開や事後研で研究を深める。	B	各学部で授業研究するテーマや教科を検討する。毎月、授業研究の日を設け、チームで教材研究や指導案の作成、授業の準備などを行う。公開授業を実施して事後研で他学部との交流をしながら研究を深める。	研修支援部
		年間を通じてＰＤＣＡサイクルを回しながら授業改善を行う。	B	ＰＤＣＡサイクルを回すために、授業について学び合ったり相談し合ったりする意識が高められるように、授業研究や授業公開ウィークなどを通して啓発する。授業研究で取り組んでいる内容を他の授業にも取り入れながら授業改善を行う。	
危機予防・対応が可能な学校づくりの推進	危機に対する児童生徒の意識高揚と対応の能力の育成	防災訓練、避難訓練、シェイクアウト訓練等を実施し、緊急事態発生時の避難経路や避難方法を体験・経験を通して身に付ける。	B	地域の災害特性を理解した上で正しい知識や技能を身に付け、主体的に判断し行動する力を育成できるよう地域事業所、施設、警察等と協力しながら防災訓練を実施する。	総務部
	児童生徒が安心できる学校づくり	生活アンケートを実施するとともに、生活の中で注意深く観察を行い、児童生徒の気になる事象を早期発見、対応できるようにする。	B	年間３回の実施は妥当と考える。アンケートで気になる部分については、各クラス単位で細やかな聞き取りを行うことで、個別に対応することができた。今後も継続しての取り組みが必要である。	生徒指導部
	医療的ケア児や緊急時の対応が必要な児童生徒の安全安心な環境づくり	指導医や看護師の指導助言をもとに緊急時の体制を確立し、ケーススタディ等を各学部と連携して実施する。	B	指導医や看護師の指導助言を仰ぎながら、各学部と連携しケーススタディや話し合いを実施する。全教育活動のみならず、登下校の安全について緊急体制を確立していく。	保健部
	感染症や熱中症、学校事故の効果的な予防	各学部長や各授業担当者と情報を共有し、注意喚起するとともに適切な支援を行う。	B	各学部長や授業担当者と連携し、きめ細かい指導・支援を継続する。全校児童生徒が見て学べるように、掲示板で熱中症や感染症予防の注意喚起をする。	保健部
		各学部長と連携し、ヒヤリハット報告をこまめに行える体制を作る。	B	ヒヤリハット事案を学部会や学級の日でこまめに報告するよう推進する。	
		保護者に対して熱中症防止の取組などについて情報提供を行い、連携を図る。	B	今後も、ラクメや保健だよりを活用し、熱中症防止のための情報発信を継続する。	

兵庫県版コミュニティ・スクールを核とした学校づくりの推進	学校運営協議会やＰＴＡ、保護者、地域住民との連携による体験学習の推進	ＨＰやブログの更新回数を増やすことで、保護者や地域住民等が本校の教育活動について理解を深める機会を創出するとともに、本校の活動への参加を呼びかける。	B	学部通信・学年通信等の内容はブログへ移行し、更新回数をさらに増やしていく。保護者や地域住民等が本校の教育活動について理解を深める機会を創出するとともに、本校の活動への参加を呼びかける。	総務部
		地域の人材や外部専門家を活用して交流学習やeスポーツ交流会等を実施し、特色ある学校づくりを推進する。	B	地域の人材や外部専門家を活用して、学校や介護施設と交流学習、eスポーツ交流会等を実施し、特色ある学校づくりをさらに推進する。	
		ＤＸハイスクール事業について地域住民や関係機関に情報提供することで、地域が直面する課題に対して学校と地域が協働して取り組む。	B	ＤＸハイスクール事業について地域住民や関係機関と協力しながら地域が直面する課題について協議することができた。次年度は、学校と地域が協働し、具体的に活動を行う。	
	センター的機能の発揮	小中学校等からの教育相談や講師依頼を受け、適宜対応をする。	B	市内学校園の教育相談では、フォーマル・インフォーマル両面からの適切なアセスメントを心がけ、よりよい支援方略を一緒に考える。各校依頼の研修会講師や、市内の教職員対象のオンライン研修講師等、特別支援教育の理解・推進を市教委と連携し進めていく。	研修支援部
		講演会や教材展等を学校園や関係機関に公開する。	B	市内学校園や関係機関に向け、教材展の企画・公開や今年度と同回数程度の公開講座を夏季休業期間を中心に計画的に設定する。教材展出用の教材について、日頃から出展への意識づけを声かけ等で行っていく。	
		学校園や関係機関との連絡・調整を図ったり、会議等に参画したりする。	B	高校通級の新たな巡回校がスムーズに運営できるよう、協力校として、充実に向け、取り組みを進める。各種協議会、会議、連絡会に参画時に、横の連携を意識してつながりを持つ。	
研修の計画的な実施と内容の充実	外部専門家事業を活用した支援指導内容の改善。	外部専門家の意見を参考に学級の日や学部会で支援・指導の内容を検討し改善を続ける。	B	外部専門家の意見をいただく前に、課題を焦点化し、教師間で共通理解をする。 外部専門家より意見をいただいた後、教育活動において具体的にどう反映していくか学部会や学級の日に検討する。	小学部
	性教育に関わる指導の充実	命の安全教育、ＬＧＢＴＱに関する課題について、各学部、学年と連携し発達段階に応じた指導を進める。	B	性教育担当者会を中心に「いのちの安全教育」等の国や県が推進する法令や通知を参考にし、より具体的な指導内容について検討し実践する。 全体計画を再検討し実践的な計画を作成する。	保健部
		性教育担当者会を中核とし、教職員間で教材や実践例を共有したり、各学部の取り組みを保護者に発信したりする。	B	性教育担当者会で話し合った内容を学部会で共有したり、保護者に発信することができた。この態勢を継続して行く必要がある。	
	校内研修の推進	教員の専門性の向上や資質を高める自立性の向上、教員集団のチーム力の向上を目指した校内研修を計画的に実施する。	B	各委員会や各係部会から研修内容の希望を吸いあげ、整理して計画的に研修を行えるようにする。	研修支援部
		様々な分野の専門家を外部講師に招聘し、活用する。	B	本校の課題により合った分野の専門家を招聘し、実践に生かせるようにする。児童生徒の実態把握や指導、授業づくりなど、外部専門家と教師が協働できるような講演以外の招聘も増やす。	
		月ごとにＯＪＴ研修目標をかかげることで、教員に取り組むべきこと明示し、専門性の向上を図る。	B	ＯＪＴ研修目標を今年度同様、パソコンの画面や職員室に掲げて、目標を周知する。学級の日や学部会などでも話題にあげることで、実践的指導力の向上を目指す。	
		公開授業ウィークを毎学期に２週間程度設定して、教員が互いの授業から学び合う機会を設ける。	B	公開授業ウィークを毎学期に２週間程度設定する。公開授業ウィークの週には現場実習や学発の練習期間ができるだけ入らないようにして参観しやすいようにする。全体だけでなく学部での啓発をして、教師が互いの授業から学び合えるようにする。	

４　学校関係者評価
【情報発信について】 ・ブログが充実し、学校の様子がよくわかるようになってきている。保護者は学校の活動に興味関心があり、知りたいと思っている。保護者はスマホでブログを見ることが多いと思われるので、ＱＲコードから見ることができるようにするなど、意識した編集を行う方が良い。地域の小学校等では、インスタグラムが活用されているので、氷上特別支援学校でも検討しても良いかもしれない。 ・ブログ等を閲覧する際に保護者のみが閲覧可能なパスワードを設定すると、モザイクをかけずに記事をアップロードできるのではないだろうか。 ・ホームページやブログ等、作る側も見る側も気楽にできるような工夫をしていくと良い。 【氷上特支防災の日について】 ・関係機関や保護者を巻き込みながら、素晴らしい取組であった。関係機関の職員もブース運営に主体的に関わることができ、モチベーション高く取り組んでいる様子がうかがえた。 ・体験することで学ぶことは子どもだけでなく、大人も同じである。体験することのすばらしさ、やってみないとわからないということに気づくことができた。次年度も是非実施して欲しい。 ・氷上特支防災の日に参加した後、改めて教室の見ると、児童生徒用にヘルメットが配備されていてることに気づいた。体験することで防災に対する意識付けになる。 【進路合同セミナーについて】 ・丹波地域においては、今まで事業所と療育（福祉）の部門が別々に集まるだけで、一堂に会する機会が無かった。それを今回開催した進路合同セミナーが実現させてくれた。氷上特別支援学校は、丹波地域の事業所と療育（福祉）を繋ぐ貴重な社会資源である。是非、次年度以降も続けて欲しい。 ・地域の中学校の特別支援学級や県立高等学校に在籍する生徒にとっても情報を得る貴重な機会になると思われる。次年度は案内をして欲しい。 ・丹波市の商工会に働きかけるなどし企業の参加も呼びかけて、合同セミナーの内容の充実を図って欲しい。 【農福連携について】 ・事業者や市役所等の関係者が集まり、お互いにどのようなことができるのか等について協議する会が毎年開催されている。情報を収集しながら、できることを探っていくことで、高等部が行っている作業学習（農工）の内容を充実させることができる。就労を踏まえた内容に学習内容を変化させることができるかもしれない。 【ＤＸ事業について】 ・事業所から依頼された商品を、３Ｄプリンターで生徒が製作する。イメージとしては、高等部が行っている木札製作のように事業所と学校が協働できる取組が実施できれば良い。そうすることで、高等部の作業学習の内容が豊かなものになる。 ・ものづくりハッピーステージ等で学習内容の紹介や体験等を実施し、理解啓発したことはよかった。今後も継続して欲しい。 【学校評価・その他について】 ・学校の取組は年々良くなってきているにも関わらず、自分たちの取組に対して厳しい評価を付けているという印象である。それだけ職員が真剣に取り組んでいるということだと思われる。 ・学校の様子が良くなってきているように思う。種をまき、それが芽吹き、花が咲いている感じがする。学校の雰囲気が良い方向に変わってきている。地域の人たちにも学校に来てもらい、一緒に様々な取組をしていって欲しい。 ・動作法ができる教員がいるのであれば、コミュニケーションのツールとして取り組んでいって欲しい。 ・コミュニティ・スクールの今後の在り方として、学校運営協議会のメンバーの他に学校の教育活動に協力してくださるメンバーを募り活動を充実させることができれば良いと思う。